

巻頭言



## H型組織への新たな展開

Toward H-type organization

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科口腔インプラント学分野  
澤瀬 隆

私は公益社団法人日本補綴歯科学会令和3・4年度渉外委員長を拝命しております。今期理事長を務められている馬場一美先生が、就任時の活動指針として7つの目標を示されました。その中の「研究・臨床教育活動の拡充：夢のある学会に！」と「他学協会・国際誌との連携強化」の両目標達成の一翼を担うため、これまでの「国際渉外委員会」は「渉外委員会」と改められ、国内、国際の全方位渉外活動を所掌することになりました。想像に難くなく、広範にわたる責務ではありますが6名の委員の先生方とともに協力して任にあたっています。

渉外とは「外部と連絡を取り、交渉や折衝を行うこと」とされています。日本補綴歯科学会の国際渉外活動については、これまで脈々と受け継がれた、海外学術団体との交流を継続していきます。コロナ禍ということもあり、対面での交流はいまだ難しいのが現状ですが、オンライン学術大会やセミナーへの講師派遣を通して交流を図っています。昨年度はAAP（アジア補綴学会）、IPS（インド補綴学会）、KAP（韓国補綴学会）への招待講演者派遣やAwardへの参加のとりまとめをさせていただきました。またAAPでは、現在補綴専門医認証システムの構築を検討しております。それぞれの国の教育におけるバックグラウンドや社会環境が異なる中で、すでに専門医制度が確立し、さらに歯科専門医機構が承認する広告可能専門医へ歩みを進めているJPSには、強いリーダーシップを期待されているところです。こちらの進捗に関しては適宜Letter for membersやメルマガでご報告させていただきます。

さて、新たな任務として加わった「国内渉外」につきましても、補綴学会ではこれまでも学術大会の際に、共催シンポジウムという形での関係を図って参りましたが、さらに継続性や一貫性を担保し、ひいては若手にとって夢のある学会そして学術大会に繋がるような連携が求められています。最初の連携候補として、日本臨床歯科学会（SJCD）が挙がり、そのキックオフとして先日開催されました第131回日本補綴歯科学会学術大会において学術交流協定調印式ならびにシンポジウムが開催されたことは、皆さんの記憶に新しいところだと思います。この連携の意義と展望につきましても、同学術大会のメインシンポジウムにて両学会の理事長、副理事長がともに「バックグラウンドが異なるからこそ意味があり、お互いをリスペクトしながら新たな扉を開きたい」と述べられていましたとおり、今後の発展が期待されることです。

さて、「連携」といっても、同じ読みで「関係」と表されることがあります。「連（連なる）」は同じですが、それに続く「けい」の漢字で多少意味合いが異なるようです。「連携」とは「協力して物事を行うこと」とされ、複数の人間や組織が相互に連絡を取りつつ、協力し合っものごとに取り組むことを示します。「プロジェクトを成功させるために複数の企業と連携する」などのように「協働作業」に主眼が置かれます。これに対し「関係」とは、人や物が互いに密な繋がりをもつことです。「見事な関係プレー」などのように用い、密接な繋がりを持つことに主眼が置かれます。今回の日本補綴歯科学会と日本臨床歯科学会の「レンケイ」は、「連携」「関係」

両者の意味を併せ持ち、密接に繋がりを持ち、協力し合って研究、臨床両面からの学术交流の活性化を図りたいと思います。最近ビジネスパーソンを分類するキーワードとして、T型人材、H型人材という言葉を目にします。専門性を縦の軸、幅広い領域への理解を横の軸として、I型人材が、ある一分野に特化して秀でているスペシャリスト、一型人材が、さまざまな分野に浅く広く精通するゼネラリストとされています。そして昨今I型、一型のいずれの側面も持つ人材に注目が集まっています。すなわち一つの専門分野に精通したうえで広い知識も有しているT型人材や、ダブルメジャーとも称され2つの専門分野を持つII型人材です。特に深い専門スキルと広い知識を基盤として、ほかのT型人材とのつながりを仕事に活用できるH型人材は、異なる領域の専門家との協業を推進できることからイノベーション人材とも呼ばれています。これらを学会組織になぞらえると、補綴歯科学会は、既にいくつもの専門領域を持ち、それらが密に横の連携を保つII型組織といえます。そして多様化する社会の中で、SJCDをはじめとする他学協会との「レンケイ」は、さらなる厚みを加えたH型組織への発展をもたらしてくれるものと祈念しています。渉外委員会として日本補綴歯科学会のさらなる発展に貢献できるように尽力して参ります。